

目 次

1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻・看護学専攻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻・・・・・・ 7

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻・・・・・・ 16

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻・・・・ 27

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻・・・・ 32

2. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

看護学専攻・看護学専攻（平成27年度）

看護基礎教育を担う看護師学校・養成所の入学定員のうち大学が占める割合は約3割に達し、大学における教育・研究力の向上が強く求められている。看護学専攻では、看護学の発展に寄与する教育・研究活動を目指して、教員それぞれが主要な研究課題を遂行するとともに、国際化に向けて、国内外の学会等での研究成果の報告、トップジャーナルへの論文掲載を目指し、また、後述の学生対象の短期交換留学等の充実に取り組んだ。

教育においては、優れた人材の輩出が社会的ニーズと考えられ、大学院受験者の質・量を安定的に確保するために、学部学生に対して大学院進学を意識する教育環境を整える取り組みや、大幸キャンパスで行ってきた大学院説明会に加えて、本学医学部附属病院看護部・看護キャリア支援室との協働で、職員対象の大学院説明会を新たに開催した。また、博士課程（後期課程）の学位授与率の向上を目指して、拡大大学院委員会を開催して、学位審査の手順等について教員間で情報の共有と意識の向上に努めた。

これらの教育研究活動を支える基盤として学部教育の充実に図り、カリキュラム改訂に向けたワーキンググループの活動とともに、看護教育の将来像を描きながら3年次編入学制度の見直しと助産教育の大学院化について議論を重ねた。併せて、教育の受け手である学生が抱えている問題の把握と、指導教員を中心とするきめ細やかな個別対応に努めた。大学院生を対象とする韓国の延世大学との学術交流等の取り組みは、若手研究者の国際的活動の推進として貴重な機会となっている。また、学部学生を対象に、看護学専攻独自の短期交換留学を複数設けたことによって、多くの学生が有意義な学習の機会を得ることができた。

今年度、医学部附属病院卒後研修・キャリア形成支援センターに看護キャリア支援室が新設されたことを受けて、看護部、看護学専攻、看護キャリア支援室の各組織がより一層連携を深めて発展的活動ができるための基盤づくりとして、連携と調整に努めた。

1. 運営

1) 組織構成

平成24年4月の大学院講座化以降、基本的な組織は2講座制（基礎・臨床看護学講座、健康発達看護学講座）で、大学院教育等の運営にあたってきた。また、兼務の学部教育は、4領域体制で対応し、基礎看護学9名、臨床看護学10名、発達看護学8名（うち1名は平成27年10月着任、1名は育休代替）、地域在宅看護7名の計34名の教員構成であり、特任准教授（名古屋大学がんプロフェSSIONAL養成プラン）1名とともに、教育研究活動にあたった。

2) 運営状況

看護学専攻では、看護学専攻教授会（毎月1回、必要に応じて臨時開催）、全教員による看護学専攻会議（毎月1回）を定例開催し、専攻の運営方針、委員会活動、日常の諸問題等への対応を行った。また、大学院委員会（毎月1回）をはじめ、各委員会の活動を通して、専攻内の教育研究活動のより円滑な運営と課題の抽出に取り組んだ。

3) 医学部附属病院との連携

医学部附属病院看護部、看護学専攻に看護キャリア支援室が加わった新体制でユニフィケーション委員会を組織化、定例開催とし（毎月1回）、看護教育の協働に関する各役割と連携の調整を行った。また、年に2回開催する看護専門委員会では看護部（看護部長、看護副部長、看護師長等）、看護キャリア支援室、看護学専攻全教員が一堂に会して、実習等の現状と課題を共有し、うち1回は看護部との合同FDを同日開催し、実習指導能力の向上にも努めた。

2. 教育活動

1) 学生について

学部：平成27年4月には新入生83名（女子78名、男子5名）と編入生5名が入学した。また、平成28年3月には、看護学専攻87名（留学生1名、編入生8名を含む）が卒業した。

大学院：平成27年4月には博士課程（前期課程）17名（基礎・臨床看護学分野7名、健康発達看護学分野10名）、博士課程（後期課程）9名（基礎・臨床看護学分野4名、健康発達看護学分野5名）が入学した。また、平成28年3月には、博士課程（前期課程）14名（基礎・臨床看護学分野6名、健康発達看護学分野8名）、博士課程（後期課程）3名（基礎・臨床看護学分野1名、健康発達看護学分野2名）が修了した。

2) ガイダンス

平成27年4月3～8日に学部新入生（1年生、編入生）、新2～4年生、大学院新入生（前期・後期課程）に対して専攻共通・専攻別ガイダンスを行った。学習（修）計画、学生生活、感染対策、図書、情報、ハラスメント関係等、一部に倫理審査、国試・就職等に関するガイダンスを行った。

3) カリキュラム・資格等

学部：平成27年度卒業生は、保健師資格を取得できる教育が選択制となった新カリ

キュラムを適用した最初の学年であった。3年次4月に保健師・助産師各選抜試験を行い、保健師選抜は16名、助産師選抜は10名が合格し教育の充実に努めた。このうち平成28年2月に保健師16名、助産師5名が、また看護師は80名が国家試験を受験し、全員が合格した。

大学院：看護学専攻博士課程（前期課程）のがん看護専門看護師（CNS）コースは、従来の26単位から38単位カリキュラムに移行して教育のさらなる充実に努めた。小児看護CNSコースは26単位カリキュラムを継続し、今後単位数の変更を含めて対応を検討する。平成27年4月入学者のうち、がん看護CNS3名、小児看護CNS1名、平成28年3月修了者はそれぞれ1名、3名であった。

リーディング大学院“ウエルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム”は2年目となり、本格的に教育プログラムが実行された。平成28年3月に女子大学院生第一期履修生1名が前期課程（看護学専攻）を修了し、今後、同プログラムの履修生として後期課程への進学を予定している。

4) 国際交流

学部：平成27年度についても、日本学生支援機構「海外留学支援制度」からの補助金を獲得することができ、延世大学（2名）、上海交通大学（2名）、シンガポール国立大学（6名：支援を受けたものは4名）が病院実習、授業や演習への参加などの短期交換留学（8～10日間）を行った。海外からの学部生等の受入については、延世大学から2名、上海交通大学から3名（ただし、平成27年度は大学院生1名と教員2名）、および、シンガポール国立大学から4名が来学し、約1週間の病院見学、授業への参加などのプログラムに参加した。ちなみに、これら留学生の受け入れに関しては、学生の国際交流ボランティアサークルSNuPYが中心となって、多くの学部生を巻き込んだ留学生との文化的交流が行われている。

大学院：名古屋大学-延世大学学術交流集会在11月5～7日に韓国・延世大学ウォンジュ校で開催され、看護学専攻からは教員2名の他に大学院生3名が参加し、研究発表や病院等の施設見学などが行われた。

5) 感染対策

保健学科感染対策委員会の方針に準じながら、看護学専攻における実習時期や内容に合わせて感染予防対策を行っている。専攻内感染対策委員会を中心に感染症抗体価検査の実施と結果の確認、ワクチン接種状況の把握、胸部レントゲン写真の結果の把握等に努め、各実習前にこれらの結果を病院の研修担当部門に報告している。また、実習中も学生に対して感染予防対策の徹底を図るとともに担当教員を中心に学生の健康状態の把握に努め、看護部や病院の感染部門と連携しながら、感染の予防や拡大を防

ぐ活動を行っている。学内においても学生に対してガイダンス等で感染予防教育を行うとともに、インフルエンザワクチン接種の勧奨やインフルエンザの感染状況の把握に努めている。

3. 研究活動

看護学専攻教員は、各自主要な研究テーマに取り組み、科学研究費等の外部資金を得ながら研究活動をより遂行することに努めた。教授・准教授による研究内容の一部を以下に示す。

- 太田 勝正 : 情報倫理・情報プライバシーに関する研究、看護用語の標準化に関する研究、看護倫理に関する研究、放射線看護・放射線防護に関する研究
- 山内 豊明 : 看護実践におけるアセスメントの理論構築と実践的研究、看護ケアについての評価システムならびにその指標の開発、医療の質・安全ならびにマネジメントに関する研究、医療専門職間の関係性ならびに相補性についての研究
- 藤本 悦子 : 看護技術の検証と開発、睡眠・せん妄に関する研究、リンパ浮腫ケアに関する研究、組織再生を促すドレッシング材の開発
- 本田 育美 : 慢性の病をもつ人の健康行動（セルフマネジメントや疾病管理）に関する研究、高齢者のヘルスプロモーションに関する研究、看護師の臨床推論に関する研究
- 大島 千佳 : 看護技術の検証と開発、睡眠に関する研究、血液およびリンパに関する研究
- 安藤 詳子 : がん性疼痛緩和に関する研究、終末期看護に関する研究、がん患者の症状マネジメントに関する研究
- 大川 明子 : がん患者・家族への看護ケアの探求、遠隔がん看護支援システムに関する研究、補完・代替療法に関する研究
- 池松 裕子 : 循環危機患者の自覚症状、クリティカルな患者のQOL、発達障害のある看護学生の学習支援プログラム開発
- 横内 光子 : 救急看護に関する研究、周手術期看護に関する研究、急性期医療システムに関する研究
- 河野 由理 : 精神障がい患者の退院支援や地域ケアに関する研究、児童・思春期の精神保健に関する研究、精神看護の技術および評価に関する研究、看護師のメンタルヘルスに関する研究

- 刈田 英津子 : 認知症高齢者のケアに関する研究、認知症高齢者の介護者支援に関する研究、高齢者ケアの教育方法と評価に関する研究
 浅野 みどり : Special needs (一過性でない健康問題) をもつ子どもと家族の看護、家族の価値観と強みを尊重した養育期の家族への予防的ケア: アレルギー疾患、発達障がい、多胎児育児など、子ども家族のWell-being
 奈良間 美保 : 子どもと家族主体の在宅ケアを支えるケアモデルと実践推進システムの開発
 玉腰 浩司 : 生活習慣病に関する研究、母子保健に関する研究、婦人科疾患・周産期疾患に関する研究
 入山 茂美 : 母乳育児に関する研究、産痛緩和ケアに関する研究、思春期の若者の性行動に関する研究、国際母子保健に関する研究
 島 明子 : 女性のヘルスケアに関する研究、中高年女性の更年期症状のケアに関する研究、周産期ケアに関する研究
 高橋 由紀 : 哺乳探索行動と母子相互作用に関する研究、Skin-to-skin contactに関する実証的研究
 梶田 悦子 : 生活習慣病とライフスタイル、エビデンスに基づく保健師活動
 榊原 久孝 : 生活習慣病の健康管理、職場の保健管理、物理的因子(振動)による健康影響
 渡井 いずみ : 産業看護に関する研究、ワーク・ライフ・バランス支援に関する研究、公衆衛生看護における家族支援に関する研究
 平井 真理 : 高血圧・虚血性心疾患患者の生活支援に関する研究、動脈硬化の予防と治療に関する研究、不整脈の薬物療法・非薬物療法に関する研究
 前川 厚子 : がんサバイバーのQOLと教育に関する研究、スキンケアと褥瘡管理に関する研究、ストーマ保有者のQOLと教育に関する研究、スキンケアと創傷管理に関する研究、ストーマ保有者のQOLと適応に関する研究、訪問看護師のキャリア開発に関する研究、炎症性腸疾患に関する研究、看護・介護用品の開発と安全性に関する研究

4. 対外的活動

1) 国立大学保健医療学系代表者協議会

国立大学保健医療学系代表協議会が平成27年6月1日に、同協議会看護学分科会が同年5月31日に、いずれも弘前市で開催された。大学院後期課程における入学定員割れや、大学院への外国人留学の入学試験等、各大学で抱える課題について議論が行われ

た。

2) 日本看護系大学協議会総会

日本看護系大学協議会定時社員総会が、平成27年6月15日に東京で開催され、会費の値上げや日本看護学教育認証評価機構の設置等の審議が行われた。

(主任：奈良間 美保)

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻（平成27年度）

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究の目標は、以下のとおりである。

- ・ さまざまな画像診断技術（CT、MRI、X線、核医学装置、USなど）の原理や特性を理解し、安全・確実に機器の能力を最大限発揮できるようにする。
- ・ 治療のため人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 放射線が人体に及ぼす影響について幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識ばかりでなく豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 日進月歩する医療分野の進歩を理解し、指導的立場となる医療技術者および放射線技術科学を学ぶ人々を指導する人材を育成する。
- ・ 自ら医療の進歩を創出し世界的な研究の一翼を担うことができる研究者を育成する。

1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育に関するさまざまな問題、教育研究費の予算配分等の運営は、毎月1回の専攻会議、並びに専攻教授会の合議に基づいて行われている。

2. 教育活動

学部教育：

平成27年度の新入学生は、新1年生が41名、3年次編入者は1名であった。2年生は41名、3年生は44名（編入生1名を含む。）、4年生は50名（編入生3名を含む。）で、4年生は12名の教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。また、3年生以下の学生も12名の教員が指導教員となり、勉学、生活の両面で指導を行っている。第68回診療放射線技師国家試験（平成28年2月25日実施）は4年生40名（卒業見込）が受験し、そのうち38名が合格した（合格率95%）。編入生を含む卒業生43名の進路は、医療機関に30名（うち、大学病院5名）、大学院進学が13名であった。学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習など、将来医療現場で役に立つと思われる教育活動が行われている。また、研究力の強化のため3年後期から

卒業研究のための研究室配属を行っている。

大学院教育：

平成27年度は博士課程（前期課程）1年11名、2年16名、博士課程（後期課程）1年3名、2年2名、3年8名の計41名であった。前期課程では16名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。社会人1名を除く15名の修了者の進路は医療機関13名（うち、大学病院8名）、企業2名であった。以下、学生名と修士論文題目を記す。

井上 政輝	実測とモンテカルロシミュレーションを用いたX線CT管電流変調に関する研究
大幡 里奈	異なるデジタルマンモグラフィシステムにおける画像描出の相違に関する研究
岡本 千鶴	マンモグラフィ装置への搭載を目指した検出器の物理的画質特性に関する研究
奥村 聡	Open-Close-PET装置の開発
北川 智基	陽子線治療におけるfield size factorの軸外距離依存性の評価
下小牧遼太	陽子線治療計画への実効原子番号の適用
鈴木 直樹	呼吸同期照射法における放射線治療計画時の最適化に関する研究
關原 恵理	コリメータを用いた陽子線スキャニング治療における中性子周辺線量当量推定モデルの作成
曾貝 佳佑	X線CT画像における各画素の雑音の性質に関する検討
高尾 友也	超音波動画像観察における視認性の向上に関する検討
土屋 沙貴	I-123 シンチグラフィを用いた甲状腺癌全摘術後の転移巣の評価に関する研究
内藤 啓介	薬剤物性に基づく水溶性ヨード剤の造影特性に関する研究
宮地 貴之	ポリマーゲル線量計の信号値読み取りに関する研究
村上 誠介	カーブレット変換を用いたX線CT画像の雑音除去に関する検討
山元 勇輝	確率共鳴現象を用いたX線CT画像のコントラスト改善に関する基礎的研究
渡辺 智哉	MRに基づいた計算流体力学による脳動脈瘤発生部位の血流動態解析に関する研究

後期課程では3名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。以下、学生名と博士論文題目を記す。

- 寺田 理希 三次元シネ位相コントラスト磁気共鳴法を用いた肺動脈高血圧症の血
行力学的パラメーターに関する研究
- 森下 祐樹 エネルギー弁別・位置検出型 α 線検出器の開発に関する研究
- 和田 康弘 小動物用PET装置における定量性向上に関する研究

3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。一部にグループによる研究活動、専攻以外との共同の研究活動も行っている。以下には各教員の研究領域を示し、外部と協力して実施している研究活動の一部を示す。

- 池田 充 教授 : 被ばく線量と画質との関係に関する研究。医用画像の画質評価に関する研究。
- 石樽 信人 教授 : 内部被ばく線量評価に関する研究：(a) ラドン壊変生成物の線量評価、(b) 放射性核種の体内挙動の計算シミュレーション、(c) 人体内放射能の排泄促進効果の体内動態モデルによる検討。
- 礪田 治夫 教授 : 磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤)・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR撮像技術・MR画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。
- 今井 國治 教授 : 数理統計学及び情報理論を用いたCAD のための画質評価法の構築。高電圧下における誘電・絶縁材料の放電劣化・破壊現象に関する研究。
- 加藤 克彦 教授 : ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の ^{131}I 内用療法。 ^{18}F -FDG、 ^{18}F -DOPA、 ^{11}C -choline、 ^{11}C -methionine、 ^{18}F -FLT、 ^{18}F -Na、 ^{18}F -FMISO、 ^{18}F -FAZA等を利用した腫瘍PET/CTに関する研究。 ^{123}I -IMP を使用したSPECT検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。
- 小寺 吉衛 教授 : 医用画像の評価法の開発。検出器、表示系を含む医用画像の解析・評価。画質の向上と被曝線量の低減を目的としたデジタル画像処理。3次元画像表示システムの開発。
- 島本 佳寿広教授 : 乳腺・甲状腺の超音波診断に関する研究。診断能に悪影響を与

- えないモニタの基準、読影環境、端末の操作性等を確立する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。
- 山本 誠一 教授 : PET装置, ガンマカメラ, 複合イメージング装置などの分子イメージング機器の研究開発。粒子線治療に関係したイメージングに関する研究。
- 津坂 昌利准教授 : 術中MRI を用いた脳外科手術ナビゲーションシステムの精度に関する研究。医療用液晶モニタの画質評価。携帯情報端末の画質評価と医療への応用。IT 活用による医療技術者教育システムの開発。高速画像ネットワークの技術開発と応用。暗号化通信、画像圧縮技術の遠隔医療への応用。
- 小口 宏 准教授 : 電子線計測法 (水吸収線量計測、相互校正法) に関する研究、ポリマーゲル計測法の臨床応用に向けた開発、呼吸同期放射線治療に関する精度評価、画像誘導放射線治療 (IGRT) に関する精度評価。
- 小森 雅孝准教授 : 陽子線治療における新規照射野形成法の開発。陽子線治療における中性子被ばくに関する研究。高エネルギーX 線治療計画装置の線量分布計算精度の評価。
- 小山 修司准教授 : 診断領域X 線の計測法の研究。X 線CT の患者・術者の被ばく線量計測。診断領域X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。MR撮像技術に関する研究。
- 川浦 稚代 講師 : 人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X線CT検査における画質と線量の関係解明。
- 本間 光彦 助教 : 人体解剖実習体のX線撮影・CT撮影に関する研究。放射線カウンセリングに関する研究。CRの応用利用に関する研究。放射線治療領域における放射線計測法に関する研究。
- 福山 篤司 助教 : MR装置を用いた血管内血流動態の計測精度の検証と改善。Readout Segmented-Echo Planar Imagingを用いたQSI解析。RESOLVEシーケンスで得られるADCの精度検証
- 藤井 啓輔 助教 : X線CT検査における成人および小児患者の被ばく線量評価と放射線防護に関する研究。低線量肺がんCT検診における撮影条件の最適化に関する研究。
- 井堀 亜希子助教 : フォトンカウンティング技術を応用したマンモグラフィにおける物質同定に関する研究。

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

- 1) 第54回日本生体医工学会大会のプログラム副委員長を務めた(池田)。
- 2) 第68回診療放射線技師国家試験問題検討会の「基礎医学大要」の科目責任者として国家試験問題の検討を行った(池田)。
- 3) 国際医療福祉大学・平成27年度原子力災害影響調査等事業に関する専門委員会委員として、当事業の推進に関する審議に専門家の立場から参画した(石博)。
- 4) 独立行政法人放射線医学総合研究所・国連科学委員会国内対応委員会委員として、国による国連科学委員会への対応に関する審議に専門家の立場から参画した(石博)。
- 5) 日本放射線安全管理学会の理事を務めた(石博)。
- 6) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌“Radiological Physics and Technology”(RPT)誌の副編集委員長の一人として編集に従事した(小寺)。
- 7) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS)のprogram committeeの委員としてプログラム選考に従事した(小寺)。
- 8) 一般社団法人日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事を務めた(島本)。
- 9) 医用画像認知研究会の事務局として幹事を務めた(島本)。
- 10) 愛知県放射線科医会の幹事を務めた(島本)。
- 11) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌“Radiological Physics and Technology”(RPT)誌の編集委員として編集に従事した(山本)。
- 12) 東京で開催された次世代PET研究会の企画世話人を務めた(山本)。
- 13) 米国サンディエゴで行われた2015 Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conferenceのプログラム委員を務めた(山本)。
- 14) 一般社団法人日本核医学会健保委員会委員として診療報酬改定に関する要望項目の検討等に参画した(加藤)。
- 15) 外科系学会社会保険連合会手術委員会委員として手術報酬に対する外保連試案、新術式・改定等の検討等に参画した(加藤)。
- 16) 一般社団法人日本核医学会の評議員を務めた(加藤)。
- 17) 一般社団法人日本核医学会編集委員会の委員を務め、Annals Nuclear Medicineの編集に参画した(加藤)。
- 18) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた(加藤)。
- 19) 公益社団法人日本医学放射線学会保険委員会委員を務めた(加藤)。
- 20) 公益社団法人日本医学放射線学会編集委員会の委員を務め、Japanese Journal of Radiologyの編集に参画した(加藤)。

- 2 1) 日本核医学会第56回学術集会副会長として日本核医学会第56回学術集会（2016年）の準備活動に参画した（加藤）。
- 2 2) 愛知県放射線科医会の常任理事（集団検診、広報担当）を務めた（加藤）。
- 2 3) 東海核医学セミナーの世話人、事務局を務めた（加藤）。
- 2 4) 東海腫瘍核医学研究会の世話人、会計幹事を務めた（加藤）。
- 2 5) 東海循環器核医学研究会の世話人を務めた（加藤）。
- 2 6) 東海脳神経核医学研究会の世話人を務めた。（加藤）。
- 2 7) 名古屋PET症例検討会の運営委員、会計幹事を務めた（加藤）。
- 2 8) ニューロイメージングカンファレンスの運営委員、会計幹事を務めた（加藤）。
- 2 9) 愛知甲状腺研究会の世話人を務めた（加藤）。
- 3 0) 日本核医学会中部地方会の世話人を務めた（加藤）。
- 3 1) 心腎画像研究会の運営委員を務めた（加藤）。
- 3 2) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた（礒田）。
- 3 3) 公益社団法人日本医学放射線学会中部地方会の世話人を務めた（礒田）。
- 3 4) 日本神経放射線学会の評議員を務めた（礒田）。
- 3 5) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会の評議員を務めた（礒田）。
- 3 6) 日本低温医学会の理事・評議員を務めた（礒田）。
- 3 7) 国際凍結治療学会(International Society of Cryosurgery)の会長を務めた（礒田）。
- 3 8) 日本生体医工学会東海支部の支部理事を務めた（礒田）。
- 3 9) Brainconnect2015のAdvisory Boardとしてこの運営に参画した（礒田）。
- 4 0) 東海総合画像研究会の世話人を務めた（礒田）。
- 4 1) 脊椎・脊髄画像クラブの世話人を務めた（礒田）。
- 4 2) ニューロイメージングカンファレンスの世話人を務めた（礒田）。
- 4 3) 名古屋大学脳とこころの研究センターシンポジウムの企画に参画するとともに、演者を務めた（礒田）。
- 4 4) 第2回名古屋大学脳とこころの研究センター市民公開講座で演者を勤めた（礒田）。
- 4 5) 「ポスト『京』重点課題②『個別化・予防医療を支援する統合生命科学』」諮問委員会 諮問委員を務める（礒田）。
- 4 6) 一般社団法人医学物理学会の理事・計測委員・防護委員として会の企画・運営に関わった（小口）。
- 4 7) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療専門部会委員長として学会の企画・運営に関わり、専門部会2回、放射線治療セミナーを2回開催した（小口）。
- 4 8) 公益社団法人日本放射線技術学会の第41回、第42回放射線治療セミナーで

- IGRT、電子線相互校正法の講演を行った（小口）。
- 4 9）公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東RT 研究会代表幹事として会の企画・運営に関わり、セミナーを5回、シンポジウムを1回開催した（小口）。
- 5 0）一般社団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会を2回開催した（小口）。
- 5 1）放射線治療品質管理士認定機構認定機構の理事として会の企画・運営に関わった（小口）。
- 5 2）公益社団法人日本放射線腫瘍学会の物理技術WG 代表として会の企画・運営に関わった（小口）。
- 5 3）日本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・出版委員として会の企画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った（小口）。
- 5 4）長野赤十字病院放射線治療管理委員会の外部委員として2回の会議に参画した（小口）。
- 5 5）国立がん研究センターがん対策情報センターのアドバイザーパネル委員として、放射線治療の安全対策に参画した（小口）。
- 5 6）東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として、研究会を6回開催した（小口）。
- 5 7）東海放射線腫瘍研究会第37回技術部会にてIGRTの講演を行った（小口）。
- 5 8）平成27年度放射線治療専門放射線技師認定機構のセミナー講師（電子線計測）を行うとともに認定試験問題の作成、認定試験の実施を行った（小口）。
- 5 9）日本放射線技術学会の学術委員として研究、教育、学会の企画、提案を行った（小口）。
- 6 0）名古屋大学放射線治療物理学セミナーを4回開催した（小口）。
- 6 1）日本放射線治療専門放射線技師認定機構統一講習会基礎コース（関東1地区、関東2地区、東海地区、）で電子線計測法の講演を行った（小口）。
- 6 2）平成27年度放射線治療専門放射線技師認定機構の認定指導者実機講習会（東芝メディカル那須工場）の企画立案を行い、相互校正法の講演および実技指導を行った（小口）。
- 6 3）第26回「高橋信次記念講演・古賀佑彦記念シンポジウム」で講演を行った（小口）。
- 6 4）第68回診療放射線技師国家試験問題検討会の放射線治療技術学の科目責任者として国家試験問題の検討を行った（小口）。
- 6 5）名古屋陽子線治療センターの治療技術・物理検討委員会委員長を務めた（小森）。
- 6 6）一般社団法人日本医学物理学会の教育委員を務めた（小森）。
- 6 7）公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論

- 文誌“Radiological Physics and Technology”(RPT)誌の編集委員を務めた(小森)。
- 68) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事を務めた(小森)。
- 69) 一般社団法人日本生体医工学会評議員およびME技術教育委員会委員として、会の企画・運営・試験実施に関わった(津坂)。
- 70) 一般社団法人日本医療機器学会の評議員として、会の企画・運営に関わった(津坂)。
- 71) 一般社団法人日本生体医工学会の実施する第1種ME技術実力検定試験・試験委員として試験問題の作成、および名古屋会場実施責任者として本学において試験を実施した(津坂)。
- 72) 一般社団法人日本生体医工学会の実施する第2種ME技術実力検定試験・実行委員として試験問題の作成、および名古屋会場実施責任者として本学において試験を実施した(津坂)。
- 73) 一般社団法人日本医療情報学会の実施する医療情報技師検定試験において試験委員、および名古屋会場副責任者として試験を実施した(津坂)。
- 74) 一般社団法人日本医療機器学会の実施するMDIC(医療機器情報コミュニケーター)認定制度において、MDIC認定セミナー講師、MDIC検定試験の試験委員として問題の作成、および名古屋会場副責任者として試験の実施を行った(津坂)。
- 75) 日本生体医工学会東海支部学術集会で大会長として、その企画・準備・開催を行った(津坂)。
- 76) 公益社団法人日本診療放射線技師会および一般社団法人日本画像医療システム工業界主催の第3回モニタ精度管理セミナーにおいて教育講演を行った(津坂)。
- 77) 公益社団法人日本放射線技術学会代議員として、会の運営に参画した(小山)。
- 78) 公益社団法人日本放射線技術学会計測部会委員として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 79) 公益社団法人日本放射線技術学会中部支部副支部長として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 80) 公益社団法人岐阜県技師会第46回X線CT研究会において「最新のX線CT線量計測の動向」の講演を行った(小山)。
- 81) 日本CT技術学会理事として、会の企画・運営に参画した(小山)。
- 82) 国際計量研究連絡委員会放射線標準分科会専門委員として、本邦における放射線計量標準の運営に参画した(小山)。
- 83) 特別非営利活動法人日本X線CT専門技師認定機構X線CT認定技師試験委員会委員として、X線CT認定技師試験問題作成を行った(小山)。
- 84) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会安全性評価委員会に委員として参画した(小山)。

- 8 5) 公益社団法人日本アイソトープ協会放射線安全取扱部会中部支部に委員として参画し、平成27年5月教育訓練講習会講師、平成28年2月放射線取扱主任者定期講習会講師としてそれぞれ講義を行った（小山）。
- 8 6) 平成27年7月 公益社団法人愛知県診療放射線技師会主催、平成27年度フレッシュヤーズセミナーにおいて、「胸部単純撮影講座」の教育講演を行った（本間）。
- 8 7) 平成28年2月公益社団法人愛知県診療放射線技師会主催、平成27年度第4回研修会において、「社会人のための基礎講座－放射線カウンセリングとは、」の教育講演を行った（本間）。
- 8 8) 平成28年3月 平成27年度第2回厚生連診療放射線技師会相互啓発研修会において、「医療被ばく相談におけるカウンセリングについて」の教育講演を行った（本間）。
- 8 9) 公益社団法人日本診療放射線技師会の代議員として会の企画・運営に関わった（本間）。
- 9 0) 公益社団法人愛知県診療放射線技師会理事として、会の企画・運営に関わった（本間）。
- 9 1) 一般社団法人日本医学物理学会の防護委員会の委員を務めた（藤井）。

（主任：島本 佳寿広）

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻（平成27年度）

病態解析学講座では、正常ならびに病的状態における生体の諸現象をさまざまな専門分野からアプローチし、得られた情報を解析、統合し、医学ならびに保健学を推進するために有用な生体情報についての学術理論の展開や、新たな技術の開発およびその応用を教授・研究している。平成24年4月には名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）での大学院講座化が実現し、病態解析学講座は新体制のもとで研究、教育の礎を着実に構築してきた。本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学からなる。この6つの学問領域が先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、指導的医療人として、高度化・多様化する医療の動向を見据え、病態解析学研究を遂行できる能力の育成を推進している。また教育の目標としては、社会の急激な変化に対応可能な俯瞰力や独創力に加え、医療チームを有機的に連携させ必要な場合には産学官にわたりグローバルに活躍できる能力をもつ人材の育成を掲げている。

1. 運営

本講座は環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の6つの学問領域からなる大講座であり、運営に関しては領域間の壁をなくして一体化した体制を築いてきた。講座の運営は、講座主任（近藤）を中心に、全17名の教員が参加する講座会議の審議・決定に従って行われている。講座会議は、第1、第3水曜日の12時、ならびに第4水曜日の17時から定期的に行われ、必要に応じて臨時に開催されることがあった。

2. 教育活動

- 1) 4月に第18期の入学生42名（推薦入学生16名、前期日程入学生26名）を迎えた。第16期の3年次編入生は、入学者がいなかった。
- 2) 4月3日（金）の新入生ガイダンスには教員と1年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活に関するガイダンス、教員の自己紹介と指導教員の確認、学生の自己紹介などが行われた。
- 3) 感染対策

病態解析学講座として講座内感染対策委員を中心に以下のごとく感染対策をおこなった。

新年度開始時におこなわれる1～4年生の各学生ガイダンスにおいては、感染予防の意義およびワクチン接種の重要性について指導するとともに各種ワクチンの接種状況を確認した。4年生の臨地実習直前におこなわれるガイダンスにおいては、臨床検体を扱う上での感染予防対策実施の意義、標準予防策および感染経路別感染予防対策の実施方法について指導した。さらに各種感染症診断のための検査方法とワクチン接種の意義についても講義をおこなった。また、病原微生物学実習時における感染防止への心得として、「感染の成立と感染経路」や「滅菌と消毒」の再講義をおこなうとともに、初回実習時には衛生的手洗い演習を導入するなど、学生実習における感染予防にも努めた。

4) 4月22日（水）には検査技術科学専攻の2年生が中心になって、教員とともに新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。

5) 5月12日（火）には第15期生の臨地実習を充実させることを目的に、病態解析学講座教員、医学部附属病院検査部の教員および技師との合同会議（臨床検査専門委員会）を開催した。

6) オープンキャンパス

8月11日（火）に大幸キャンパスで実施し、申込者数220名に対して来場高校生数は約200名であった。検査技術科学専攻の説明、教育カリキュラム、教育の目標と内容、特色と卒業後の進路の説明、卒業生からの講演を企画した。その後、参加者が研究室を訪ね、教員や院生による研究内容などの説明および顕微鏡を用いた観察などを体験した。同様の内容で午前・午後ともに2時間ずつ実施したが、アンケート結果より参加者の満足を確認でき、有意義なオープンキャンパスを実施できた。

7) 8月25日（火）に3年次編入試験を行ったが、合格者はいなかった。

8) 8月26日（水）に大学院医学系研究科博士課程（前期課程）の入学試験を実施し、医療技術学専攻病態解析学分野では12名の合格者を決定した。また、8月27日（木）に同分野博士課程（後期課程）の入学試験を実施し、2名の合格者を決定した。さらに平成28年2月3日（水）には博士課程（後期課程）第2次入学試験を実施し、1名の合格者を決定した。

9) 平成28年2月2日（火）には私費留学生入学試験を実施し、1名の合格者を決定し

た。

- 1 0) 平成28年3月には、本専攻の第15期生の41名（うち1名は編入生）が卒業した。そのうち10名が大学院博士前期課程へ進学し、就職希望の30名のうち1名をのぞき、大学病院や一般病院の検査部門、検査センター、健診センターや民間企業に就職した。また、大学院医学系研究科病態解析学分野（博士前期課程）の第13期生の修了生として14名を輩出した。本年度の修了者に社会人はいなかった。そのうち2名が本学大学院博士課程（後期課程）、2名が医学博士課程へ進学し、1名が研究生（鶴舞）となった。就職希望の9名は全員が就職し、就職率は100%であった。博士課程（後期課程）では2名が短期修了し、それぞれ製薬企業と附属病院に就職した。
- 1 1) 臨床検査技師国家試験に対する準備として、全教員による教育指導と6回の模擬試験を実施した。第62回国家試験（平成28年2月24日実施）の合格者数は38/40（合格率95.0%）であった。
- 1 2) 平成27年度の教育活動の成果として、村田萌（D3）は名古屋大学学術奨励賞（平成27年6月19日）、第20回日本血栓止血学会学術奨励賞（平成27年5月21日）、第37回日本血栓止血学会学術集会優秀ポスター賞（平成27年5月23日）を受賞した。また、同じく第37回日本血栓止血学会学術集会優秀ポスター賞（平成27年5月23日）を、高木夕希（D2）と橋本恵梨華（B4）も同時受賞した。

3. 研究活動

本専攻では4月に博士課程（前期課程）に17名の第14期生、博士課程（後期課程）に1名の第12期生を迎えた。平成28年2月6日（土）に修士論文発表会を開催し、前期課程第13期生14名が成果を発表した。5月18日（月）には後期課程予備審査会（研究発表会）を開催し、短期終了予定の2名が研究成果を発表した。学部関係では5月30日（土）に、第15期生による卒業研究発表会が開催された。以下に各部門における卒業研究発表演題を示す。

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部勤 川村久美子 松島充代子

- 1 クリシンによる肥満細胞の活性化シグナル抑制機序の検討
- 2 ケルセチンによるNrf2-HO-1系の発動機構におけるオートファジーの関与
- 3 免疫複合体による胚中心形成におけるCD40の役割
- 4 脱顆粒の抑制を指標としたI型アレルギー検査法の検討

- 5 わが国における10年間のAcinetobacter属菌の変遷 - Acinetobacter baumannii international clone II の広まりと多剤耐性化-
- 6 Acinetobacter baumannii の世界的流行株 International clone II における消毒薬有効性の評価

【生体生理解析学部門-1】 指導教員：永田浩三 渡辺彰吾

- 1 メタボリックシンドロームラットの血圧および心筋傷害の食塩感受性増大におけるTNF- α の役割の解明
- 2 メタボリックシンドロームラットにおけるラメルテオンの基本病態および心筋傷害に及ぼす影響の検討

【環境病因解析学部門-1】 指導教員：近藤高明

- 1 血清脂肪酸分画と食物摂取頻度調査による推定脂肪酸摂取量の関連性
- 2 平均寿命算定プログラムの妥当性の検討 -都道府県別算定値を用いて-

【病態化学解析学部門】 指導教員：涌澤伸哉 上山純

- 1 MDR1遺伝子の発現におけるEGCGの抑制作用の検討
- 2 HCV遺伝子発現細胞における酸化ストレスと制御系の解析
- 3 バイオモニタリング手法を用いた職業的ネオニコチノイド系殺虫剤の曝露評価
- 4 子ども家庭における殺虫剤使用状況と子どもの尿中殺虫剤代謝物量の関係
- 5 使用済みオムツを利用した尿中代謝物一斉分析法の開発

【形態情報解析学部門】 指導教員：長坂徹郎 川井久美 橋本克訓

- 1 子宮内膜増殖性疾患の病理形態学および分子病理学的解析
- 2 多発性骨髄腫の病理形態学および分子病理学的解析
- 3 液状化細胞診検体を用いた甲状腺乳頭癌細胞のBRAF変異解析

【分子病態解析学部門】 指導教員：小嶋哲人 高木明

- 1 血小板膜蛋白GPIIb遺伝子に複合ヘテロ変異をもつ血小板無力症の一例
- 2 新規ミスセンス変異がもたらす先天性第VII因子欠乏症
- 3 血友病B症例における大欠失解析を含む血液凝固第IX因子遺伝子変異解析
- 4 アンチトロンビン欠乏症のSERPINC1解析

【生体生理解析学部門-2】 指導教員：平山正昭

- 1 分子状水素はDuchenne型筋ジストロフィーモデルmdxマウスの筋変性を改善する
- 2 飽和水素水飲水による血中グレリンの変化と酸化ストレス抑制の検討

3 2重連続聴覚刺激を用いた聴覚誘発磁界の反回神経抑制-加齢変化と疾患変化の検討-

【環境病因解析学部門-2】 指導教員：石川哲也 林由美

- 1 細胞傷害性Tリンパ球機能に与える脂肪由来幹細胞の影響について -in vitro及び in vivo肝障害モデルでの検討-

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

A) 国際交流

開始以来6年目を迎えた延世大学（韓国）との国際交流事業は、11月5-7日に延世大学で行われ、病態解析学講座からは3名の大学院生（藤井亮輔、中切健太、青井亜里沙）が研究成果について口頭発表と質疑応答を行った。また、交流会と同時開催されたThe Korean Society for Biomedical Laboratory SciencesのNew Paradigm of Molecular Diagnostics and Therapeuticsにて小嶋教授、近藤教授が研究発表を、林助教は病態解析学講座の教員紹介および自身の研究発表を行った。大学院生については交流会終了後にさらに11月13日まで韓国に滞在し、研究室訪問などを行った。この交流事業組織委員会には永田浩三教授と林由美助教が出席し、企画や運営の役割を担った。

8月31日から9月9日にタイのマヒドン大学アセアン保健開発研究所の協力のもとで、「タイ保健学科医療体験入門プログラム」が実施され、5名の検査技術科学専攻学部生と1名の病態解析学講座大学院生が短期研修に参加した。このプログラムには永田教授が引率教員のひとりとして同行した。

小嶋哲人教授は、6月にカナダ・トロントで開かれた第25回国際血栓止血学会（ISTH 2015）に出席し、指導大学院生3名（ポスター3題、内1題はYIA受賞）の発表を指導するとともに、欧米諸国の研究者との間で様々な情報交換を行った。また、11月には韓国・延世大学との研究交流事業に参加し、同時に開催された国際シンポジウムに最近の研究成果を発表した。

永田浩三教授は、5月に米国生理学会（APS）の心臓血管部門のRegular Memberに選出された。また9月にワシントンDC（米国）で開催されたAHA高血圧部会の年次集会（Council on Hypertension 2015 Scientific Sessions）にInternational Fellow（FAHA）として出席し、指導大学院生1名のポスター演題を発表した。

石川哲也教授は、2月20-24日に開催された第25回アジア太平洋肝臓学会（東京）に指

導大学院生2名（大原、中切）と参加し、大学院生2名がそれぞれポスター発表を行い、自身は一般演題（口演）の司会を務めた。

長坂徹郎教授は、日本婦人科病理学会理事として6月6日、名古屋市の名古屋市立大学医学部講堂において開催された第19回日韓台婦人科病理合同会議を会長として主催した。約90名の参加があり、盛会であった。

平山正昭准教授は、6月に行われたthe 19th International MDS Congressにてポスター発表を行った。12月the 21th International MDS Congressにてポスター発表を行った。2016年2月The 15th International Parkinson's disease symposium in Takamatsuにて実行委員として参加した。

川村久美子准教授は、平成25年10月に採択された博士課程教育リーディングプログラム「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムに協力教員として参加している。プログラム内ではアドミッション・リクルートWGに参画し、6リーディング合同プログラムなどの企画運営に携わることで積極的にリクルート活動を行い、10月には第2回生プログラム正規生20名を迎えた。また、プログラムの協力教員として、講義グローバルリーダーにおける講師招聘や海外実地研修の企画を行った。また、平成28年2月のフィリピンへの海外実地研修、同年3月のタイ・ミャンマー研修の企画運営にも参画した。

上山純准教授は、上海交通大学客員准教授に就任し、9月22日から25日に上海交通大学医学院公衆衛生学院を訪問した。上海における子どもの大規模コホート研究の進捗状況や生体試料中微量化学物質の分析に関する情報交換を行った。

林由美助教は、5月31日-6月4日に開催された第63回 American Society for Mass Spectrometry (St. Louis, MO, USA)に参加し、ポスター発表を行った。

B) 大学間交流

5月11日（月）に山口で第52回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催され、全国20校の代表が参加した。本学からは近藤高明主任が代表として出席した。市原議長（山口大学）の議事進行で活発な議論が行われ、主な議題としては、「実習モデルコアカリキュラムの作成に向かった取組」、「臨床検査技師の業務範囲拡大に伴う教育施設における対応」、「キャリア教育（進路指導）のためのカリキュラムとその実施時期」、「大学院博士後期課程における「単位取得退学制度」の運用」が取り上げられた。コアカリキュラム

作成に関しては、審議を継続することとなった。5月25日（月）と12月14日（月）には、東京医科歯科大学で日本臨床検査学教育協議会が開催され、近藤高明主任が代表として出席した。

涌澤伸哉教授は、8月30日－31日に岡山市で開催された第39回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会に出席し、代議員総会および一般総会において第40回学術集会を会長として名古屋大学で平成28年9月10日－11日に開催することを報告した。

石川哲也教授は、平成24年度から国立研究開発法人日本医療研究開発機構研究費「肝炎等克服実用化研究事業（B型肝炎創薬実用化等研究事業）」の2つの研究班「B型肝炎ウイルスの持続感染を再現する効率的な培養細胞評価系の開発に関する研究」と「HBV cccDNAの制御と排除を目指す新規免疫治療薬の開発」に分担研究者として参加し、前者では名古屋市立大学大学院医学研究科病態医科学 田中靖人教授と、後者では岐阜大学大学院病態情報解析医学 伊藤弘康准教授と共同研究を行っている。また、平成25年度からは、同じく日本医療研究開発機構「再生医療実現拠点ネットワークプログラム」での技術開発個別課題「iPS細胞分化・がん化の量子スイッチングin vivo Theranostics」（代表研究者 名古屋大学大学院工学研究科 馬場嘉信教授）に分担研究機関として、林由美助教とともに参加している。同研究課題においては、京都大学再生医科学研究所 田畑泰彦教授、名古屋市立大学大学院薬学研究科 松永民秀教授と共同研究を行っている。

永田浩三教授は、8月に開催された第10回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、指導大学院生1名の演題を口頭発表した。またこの期間中に開催された科目別分科会第3回例会に出席し、生体検査学（循環生理学、呼吸生理学、神経生理学、画像検査学）の会長として「学内実習の最低要求事項」に関する議事進行を行った。9月に日本臨床検査学教育協議会の機関誌である「臨床検査学教育」に前年に参加・発表した「米国心臓協会高血圧部会2014年年次集会」と題する関連学会報告を寄稿した。

川部勤教授と松島充代子講師は、中部大学応用生物学部山本敦教授らとともに推進してきた共同研究について公益財団法人科学技術交流財団の平成26年度研究会支援事業に採択された「非侵襲的治療薬物モニタリングシステム研究会」の2年度目も川部勤教授は副座長として開催した。また、同財団を事業主体とする平成27年度共同研究推進事業に採択された「高親水性表層を有する多層型薬物用吸着剤の開発と呼気中薬物モニタリングへの応用」を受託研究し、さらに「呼気を用いる非侵襲的薬物動態解析法に関する研究」（基盤研究（C）研究代表者山本 敦）をこの共同研究チームのもとで推進した。また、広島市立大学情報科学研究科 式田光宏教授との共同研究について「呼吸器末梢

気道でのその場計測を可能にするカテーテルセンサ技術の開発」(基盤研究(B) 研究代表者 式田光宏)ならびにキャノン財団研究助成のもと研究推進し、新たに2件の特許を出願した。さらにこの共同研究は(株)コスモスウェブも参加する産学連携共同開発事業と発展し、現在も継続している。

長坂徹郎教授は、大学院研究、教育の一環として名古屋市立大学病院病理診断部の山下依子准教授と婦人科領域の腫瘍に関する分子病理学的研究を行った。

平山正昭准教授は、順天堂大学医師臨床治験 パーキンソン病における水素水多施設共同試験に参加している。“パーキンソン病における腸管内細菌叢変動と各種消化管ペプチド、炎症物質および菌体成分との関与の解明”を多施設研究として秋田脳研神経内科部長 前田哲也と共同研究している。名古屋大学農学部資源生物機能学講座 浅川晋教授と腸内嫌気性菌の水素産生量の測定に関して共同研究している。

川井久美准教授は、平成27年度から「蛍光点滅観察によるRNA1塩基変異の1分子病理診断」に分担研究者として参加し、大阪大学産業科学研究所 川井清彦准教授と共同研究を行っている。

上山純准教授は、名古屋市立大学 上島通浩教授とともに環境省の環境研究総合推進費を受け、子どもの殺虫剤曝露状況の評価法開発に現在取り組んでいる。

C) 地域との連携

小嶋哲人教授は、東海ヘモフィリアワークショップ2015(平成27年8月8日)において、代表世話人として会を開催するとともに、地域への研究活動の情報提供、啓発活動を行った。また、全国的な学会活動として日本血栓止血学会(平成27年5月21-23日・山梨)での「SPCシンポジウム/Cell-based coagulation の立場からの抗凝固療法」において、シンポジストの一人として講演を行った。さらに、第8回東名古屋血液凝固異常症研究会(平成27年11月12日)で「新たな血栓性素因・アンチトロンビンレジスタンス」、東三河不整脈研究会(平成27年11月24日)で「DOACの基礎と臨床」の講演を通して啓発活動を行った。

近藤高明教授は、平成14年から愛知県犬山での「健康プラン推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきたが、平成27年度は犬山市の健康寿命の算定を行った。8月下旬に北海道八雲町で3日間実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同で疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員として2名の大学院

生とともに参加し、その成果を町民の予防活動に還元するよう努めた。1月には愛知県職員で脂質異常症の疑いを指摘された健診受診者を対象に、教育講演を行った。また名古屋大学早期予防医療創成センター教授を兼任し、名古屋COI (Center of Innovation) プロジェクトのユニットとしてトヨタ自動車の支援をうけて豊田市とともに立ち上げた「豊田健康ナビゲーター倶楽部」の運営活動に参加した。また厚労省が推進している健康保険組合主体の「データヘルス事業」の一つに山田純生教授（理学療法学講座）とともに参加し、企業従業員の健康推進活動を支援した。平成25年度からは、NPO法人「脳梗塞・心筋梗塞再発予防センター（山田純生代表）」に理事として参加している。

石川哲也教授は、日本内科学会東海支部評議員、日本消化器病学会東海支部評議員、日本肝臓学会西部会評議員として学会活動の活性化に尽力した。また、第62回日本臨床検査医学会学術集会（岐阜）では、名古屋市立大学医学系研究科 田中靖人教授によるウイルス肝炎治療に関する教育講演の司会を務め、同問題に対する啓発活動に貢献した。

川部勤教授は、松島充代子助教とともに平成22年度から開始した愛知県「知の拠点」重点プロジェクトP3超早期診断技術開発プロジェクトに参加している。また、名古屋大学大学院工学研究科 西澤典彦教授とOCTによる肺組織の観察システムの開発について共同研究を継続して行った。川部勤教授は、平成28年3月に第21回名古屋呼吸器領域卒後専門教育セミナーのプログラム委員としてセミナーを企画実行した。また、川部勤教授は、日本アレルギー協会東海支部編集委員として第22回アレルギー週間事業として「市民公開講座と相談会」を平成28年2月に高木健三支部長のもと松島充代子講師とともに主催した。さらに東海喘息研究会をはじめとする研究会の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力した。平成23年より特定非営利活動法人 中日本呼吸器臨床研究機構の監事、平成23年より特定非営利活動法人 愛知県COPDネットワークの監事として機構の運営に関わり、地域医療への活動、情報提供、啓発活動を行った。

長坂徹郎教授は、6月20日に浜松市で開催された腹部超音波学会で、病理コメンテーターを務めた。6月21日には、日本臨床細胞学会東海連合会の幹事として細胞診基礎講習会の講師を担当し、子宮内膜、卵巣の細胞診に関する教育講演を行った。12月3日には第153回日本臨床細胞学会東海連合会例会特別講演、「婦人科病理における新しい概念」を行った。平成28年3月11日には東海胃腸疾患研究会の病理コメンテーターを務めた。また、日本病理学会、国立がんセンターがん対策情報センター病理コンサルタントの委託を受け、婦人科領域の病理診断コンサルテーションを行ってきた。4月28-30日に

名古屋市で開催された日本病理学会および11月21-22日に開催された日本臨床細胞学会秋季大会では大会運営委員を務めた。

形態情報解析学部門（長坂徹郎教授、川井久美准教授、橋本克訓助教）は、東海がんプロフェッショナル養成基盤推進プランの後援を受けて、名古屋大学細胞診セミナーを開催した。本セミナーは、卒後教育の一環、細胞診の診断精度の向上を目的として平成25年度より開催している。平成27年度は計3回（9月、12月、3月）、毎回、臓器別テーマごとに著明な細胞診専門医、細胞検査士などを講師として招聘して鏡検実習を含む実践的なセミナーを開催し、東海地区の細胞検査士、臨床検査技師、学生などのべ153名が受講した。

永田浩三教授は、日本循環器学会社員、日本高血圧学会評議員、日本心不全学会評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。東海心血管再生代謝研究会の世話人および名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。6月に開催された第28回東海心血管再生代謝研究会では一般演題の座長を務めた。名古屋大学予防早期医療創成センター教授（兼任）として8月に開催された第5回ワークショップで「治療と診断薬」の座長を務めた。11月に日本循環器学会東海支部の院内調査に関する派遣医師候補者としての就任を承諾した。名城大学附属高等学校・学校評議員およびSSH 運営指導委員会委員として学校運営および高大接続のために尽力した。

平山正昭准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）としている。全国学会として、日本神経学会、日本自律神経学会、日本末梢神経学会の評議委員を行っている。地域ボランティアとして、日本パーキンソン病友の会愛知県支部の顧問を務め、年4回の地域講演活動、友の会会員旅行、2ヶ月に1回の会報の執筆を継続して行っている。企業協力として、ヤクルト中央研究所とパーキンソン病患者の腸内細菌の共同研究、Miz株式会社との水素ガスによる臭覚改善効果の共同研究、日内変動を伴うパーキンソン病における皮膚ガスならびに汗、東京堂大学薬学部血液のL-Dopa・L-Dopa代謝産物・揮発性ガス測定をピコデバイス社及び東京大学薬学系研究科角田誠講師と共同研究を行っている。

高木明准教授は、東海KOAG研究会代表幹事として東海KOAG研究会を2回（平成26年4月17日）（平成26年9月1日）主催し血液検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。東海アカデミー「スキルアップセミナーiV」（平成27年2月22日）での講演を通して、臨床検査技師の卒後教育に尽力した。

川村久美子准教授は、平成27年度採択「在宅医療患者等における多剤耐性菌の分離率及び分子疫学解析（代表 名古屋大学大学院医学系研究科 分子病原細菌学教授 荒川宜親）」に分担研究者として参画し、愛知県下の特別養護老人ホームや高齢者介護老人保健施設の入所者を対象に薬剤耐性菌の保菌率を調査した。この調査は在宅患者が薬剤耐性菌の温床になり得るか否かを解析するための国内初のパイロットスタディであり、在宅患者受け入れの際の急性期病院の感染対策に調査結果を還元できるよう尽力した。また、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）として、日本ガイシ株式会社との共同研究（新規プラズマ滅菌装置の開発）に参画しており、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。

上山純准教授は、日本衛生学会評議員と日本医用マスペクトル学会評議員として学会運営に協力した。また、岡崎市保健所が実施している研究プログラム「3歳児の尿中コチニン濃度と受動喫煙状況調査」について共同研究者として参加している。

橋本克訓助教は、愛知県臨床検査技師会・病理細胞検査研究班の班員と活動し、病理・細胞診部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。同研究班においては、平成26年度より病理検査の精度管理を担当しており、平成27年度はZiehl-Neelsen染色の染色サーベイの実施責任者として病理検査部門の精度管理事業を統括し、平成27年度愛知県臨床検査精度管理調査総括分担執筆し、精度管理調査報告会（平成28年3月12日）において染色サーベイの結果を報告した。

（主任：近藤 高明）

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻（平成27年度）

理学療法学は、身体組織および機能の障害、あるいは能力低下を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠なリハビリテーション医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。そのために、障害の原因となる病態や機能障害の発生机序を生理学的に解明する基礎研究とともに、障害の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法の基盤を創造する。また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

1. 運営

本専攻は、2012年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数8名）による講座会議（毎週水曜日12時から開催）における協議・決定にしたがい進められている。さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第1,3水曜日）を行っている。人事では杉浦英志教授が河村守雄前教授の後任として5月1日（金）に愛知県がんセンター中央病院より着任され、石田和人講師が河上敬介前准教授の後任として4月1日（水）付けで、李佐知子助教が10月1日（木）付けで、それぞれ准教授に昇任した。さらに、平成28年3月に開催された学科会議で、李前助教の後任として平川倫恵氏が4月1日着任予定で助教として承認された。

2. 教育活動

学生については、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。大学院博士前期課程では理学療法学分野、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻が理学療法学領域と作業療法学領域を併せて一講座としているため、便宜上、理学療法学関係と記述している。

○平成27年度の具体的活動内容

学部生としては、4月に保健学科理学療法学専攻第18期生として22名の学部学生を迎え入れた。性別では男子学生10名、女子学生12名であった。選抜方法による内訳は、推薦入学7名、前期日程試験入学15名であった。また、2年次編入に合格した学生

3名が加わった。大学院には、前期課程に8名（一般選抜6名）、後期課程に1名（一般選抜0名）が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1年生22名、2年生24名、3年生24名、4年生26名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療学分野の1年生8名（一般選抜6名）、2年生8名（一般選抜7名）、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学講座は1年生1名（一般選抜0名）、2年生2名（一般選抜0名）、3年生4名（一般選抜3名）となった。

新学期には4月3日（金）午前中に新入生、編入2年生に対する全体ガイダンス、午後からは作業療法学専攻とともに新入生、編入2年生に対する教務および学生生活ガイダンスを行った。ここでは作業療法学専攻と共同で、全教員との顔合わせも行った。4月6日（月）には新大学院生を対象とした全体ガイダンス、情報関係ガイダンスに続いて、リハビリテーション療法学専攻によるガイダンス、在校生ボランティアからの説明等があった。4月5日（日）午前中に入学式が行われた。4月7日（火）には2-4年生を対象とした在校生ガイダンスを行なった。この在校生ガイダンスでは、共通科目については理学療法学専攻・作業療法学両専攻合同で、専門科目については理学療法学専攻単独で、各学年別に1時間ずつを使い、本年度のカリキュラムの説明、学生生活のルールの再確認を行った。これらにより、本専攻に所属する学部学生、大学院生のすべてに対して、カリキュラムの説明、学生生活のルールの説明・再確認がおこなわれた。説明は主任、教育・FD委員、学生生活委員、授業担当教員が担当した。

4月11日（土）には、専攻内での新入生歓迎会を行った。新2年生が幹事となり、土曜日半日を使い、在校生、新入生、教員が参加し、全員の自己紹介、懇親会（大幸厚生会館）を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4月中旬から臨床実習Ⅱ、Ⅲが始まる4年生に対し、各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習をおこない、4月20日（月）から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は各種疾患を観察し、臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は多くの不安を抱きながら、実習先に向かったが、5週ごとの反省会で、種々の問題点などが指摘されながらも、全員無事この実習を終えることが出来た。4年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって、各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は7月3日（金）に終了した。4年生は7月6日（月）に臨床実習反省会を行ない、翌日に理学療法セミナーⅡの一部として、実習で担当した患者様の症例報告会を行なった。理学療法セミナーⅡはさらに吸引療法の理論と実際について、非常勤講師とともに看護学専攻教員、理学療法専攻教員らがそれぞれ担当して行った。

また、4年生を対象として地域理学療法学実習が5月26～28日、7月10～17日の期間、3つのグループに分かれて行われた。地域理学療法学実習は、ディサービスおよび訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として8月3日～8月8日の6日間、病態人体解剖実習が行われた。これには医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに、ご遺体に対する感謝の念を通して人の命の尊厳を考え、将来の医療人としてのあり方を考えるよい機会となった。

平成28年度2年次編入学試験は8月25日（火）、大学院博士前期課程入学試験は26日（水）、同後期課程入試は8月27日（木）にそれぞれ実施し、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に9名（一般選抜8名、社会人特別選抜1名）、博士後期課程理学療法学講座に3名（一般選抜2名、社会人特別選抜1名）が合格した。

9月30日（水）には博士後期課程の論文発表会（予備審査会）が本館第3講義室で行われ、理学療法学講座からは4名の学生が発表した。

学年を超えた学生間、学生と教員が密に交流する機会として、9月25日（金）から1泊2日の日程で岐阜県多治見市の文化施設「地球村」へ出かけて講演会、親睦会、バーベキューを楽しんだ。これには教員・学生合わせて約66名が参加し、専攻の絆を深めた。

第6回目となる韓国延世大学との学術交流会が企画され、本講座からは教員2名と大学院生3名が開催地となった韓国延世大学原州キャンパスに赴き、11月5日から3日間にわたって学術交流と親睦を深めることができた。また、11月8日～12日にかけて、本学の大学院生3名が延世大学に残り、学術研修や国際交流を図る機会をもった。

後期授業では4年生の卒業研究の後半部分が再開され、11月25日（水）に本館第2講義室において最終発表会が開催された。25題の発表があり、教員ならびに在学生との活発な討論が交わされた。1、2年生にとっては将来の自身の研究の参考になったと思われる。また、3年生の卒業研究中間発表会は平成28年3月11日（金）に本館第1講義室で行われた。合計23題の発表があり、1、2年生からの質問も多く、活発な発表会となった。

大学院では、9月30日（水）に博士後期課程3年生4名を対象に、本館第3講義室で予

備審査会を開催した。また、平成28年2月12日（金）に作業療法学専攻を含むリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）12期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、理学療法分野から前期課程8題、後期課程2題、合計10題の発表があった。また、3月9日（水）には前期課程1年生（14期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から8題の発表があった。博士前期課程修了者は8名で、就職6名、博士後期課程進学者2名であった。博士後期課程修了者2名が学位を取得した。

3月1日（火）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部平成27年度卒業生25名が受験した。3月25日（金）には保健学科第15期生の卒業式が執り行われた。本専攻は編入学生を含め25名の新卒業者を世に送り出した。そのうち15名が病院に就職し、7名が大学院（そのうち1名が他大学）へ進学した。

3月5日（土）には平成29年度大学院入学者のための大学院説明会が開催され、理学療法学講座説明会には、学生2名、社会人6名、合計8名が参加した。

3. 研究活動

各教員の研究テーマは、以下のとおりである。

鈴木重行教授 : 筋ストレッチングの効果に関する研究、骨盤底筋群に対する理学療法効果、作業関連性筋骨格系障害のメカニズム検証、培養筋細胞を用いたカヘキシーに関する研究

山田純生教授 : 心不全のリハビリテーション介入、電気刺激による骨格筋分解抑制、フィットネスと疾病・障害予防

内山 靖教授 : 姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究、症候障害学、理学療法学教育に関する実践的研究

亀高 諭教授 : 筋芽細胞の膜融合過程の調節機構、遺伝性痙性対麻痺の原因遺伝子群（SPG遺伝子群）の機能解析、筋分化におけるオートファジーの役割

杉浦英志教授 : がん悪液質による二次性サルコペニアの疫学的研究、骨軟部腫瘍の

術後再建術についての研究、ロコモ・フレイル・サルコペニアのレジストリ研究

石田和人准教授： 脳出血モデル動物における中枢神経の病理変化と運動療法の効果に関する研究、運動による脳梗塞障害予防効果に関する基礎的研究、抑うつモデルの確立および理学療法効果の検証

李佐知子准教授： 脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究、大脳皮質損傷後の運動機能回復メカニズムの研究

野嶋一平助教： ヒトを対象とした運動学習に伴う脳の可塑的变化の研究およびその臨床応用研究

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）が7月29日（水）に行われた。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習（OSCE）試験の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、後期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、第18回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月17日（木）～18日（金）、担当：名古屋大学）であった。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月11日（火）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、参加した高校生に保健学科全体の説明がなされた後、各専攻に分かれ、本専攻の特徴などについて主任の鈴木教授が説明した。本専攻の説明会には191名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答えた。質問も多く、高校生の興味の深さが伺われた。

10月28日（水）には地震防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加し、救助袋による避難訓練、初期消火訓練として消火器の取扱説明、消火栓による放水などがおこなわれた。

（主任：鈴木 重行）

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻（平成27年度）

作業療法学講座および作業療法学専攻(以下、本講座)は、作業療法に関する学問的体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を目的として設置された。本専攻は、作業療法士専門職教員と医師教員から構成され、それぞれの専門を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に努めている。

1. 運営

平成27年度の本講座は、辛島教授（主任）ほか3名の教授(内、千島教授は平成27年4月に着任。)、准教授3名、助教2名より構成されている。本講座の年度運営は、全教員が参加する専攻会議（毎週水曜日開催）によって教育および研究活動の具体的な年次進行に沿った活動方針を決定している。本会議では、名古屋大学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせて年間行事、事業についての計画とその計画進行状況の確認をはじめとして、予算に関する事案、学生の教育に関する事案（成績関連、単位認定、進級関連、卒後進路など）、学生生活に関する事案、臨床実習に関する事案（実習計画、臨床実習施設との連携など）、その他保健学科全体の諸課題についての講座としての方針や考え方を討議決定している。特に、個々の学生への対応など具体的な課題について詳細な検討や課題解決への方策を決定している。

また、人事など教授専任事項については随時、講座教授会議にて審議している。本会議は構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。

リハビリテーション療法学専攻で密な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議を設け、作業療法学講座・理学療法学講座の全教員が参加し、共通する課題検討に取り組み、連携・協力を図っている。

大学院運営の機構としては、作業療法講座は理学療法講座とともにリハビリテーション療法学専攻の会議を月に1回定例で開いている。

2. 平成27年度大学院，学部の教育活動

作業療法学専攻の平成27年度入学部学生は、20名。選抜方法による内訳は、推薦入試で入学した学生は7名、前期日程試験で入学した学生は13名。性別では男子学生5名、女子学生15名であった。また、平成19年度より募集を開始した2年次編入学生は1名。性別では男子学生0名、女子学生1名であった。

平成27年度の大学院博士課程前期課程作業療法学講座には7名。性別では男子学生3

名，女子学生4名が入学した。内訳は，一般選抜による入学生は5名，社会人特別選抜による入学生2名であった。

また，平成27年度の博士課程後期課程作業療法学講座には4名。性別では男子学生2名，女子学生2名が入学した。内訳は，一般選抜による入学生は2名，社会人特別選抜による入学生2名であった。

- 1) 平成26年4月5日の入学式以後：学部新生・編入生および大学院新生のガイダンスを実施している。毎年度始めには新生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施し，当該年度における教育内容，学生生活に関する説明と確認を行っている。近年では，大学生活における安全衛生に関する諸注意，大学生として守るべき個人情報に関する注意など，情報化社会に対応した諸注意が重要であり，この点にも留意したガイダンスとなるよう努めている。大学における学修と生活の基本的内容については作業療法学講座および理学療法学講座と合同で行い，個別の内容について講座別にガイダンスを行っている。この時期4年生については臨床実習が既に始まっているために，ガイダンスは前年度末までに行われている。
- 2) 平成27年4月18日（土）・19日（日）：犬山国際ユースホステルでのガイダンス。通称「犬山ガイダンス」は，一泊二日の日程で行われる学部新生・在校生合同（学部4年生を除く。）の年度当初ガイダンスである。本年度も昨年と同様に愛知県犬山市犬山国際ユースホステルで開催された。新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され，全教員や2年生3年生先輩からの公私的な示唆や助言などを通して実施された。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。
- 3) 平成27年4月1日（水）から8月7日（金）：4年生臨床実習実施。学部4年生を対象とし最終年次前期期間中，学内外の臨床施設（名古屋大学医学部附属病院を含め64施設）にて臨床実習を行った。実習期間を3期に分けて臨床実習Ⅰ（身体障害分野），臨床実習Ⅱ（精神障害分野），臨床実習Ⅲ（発達障害分野および老年期障害分野）の医療機関・施設で臨床実習を行った。総計18週間の実習を行った。4年生の学外臨床実習に際しては，各施設に担当教員を配置し，実習学生の学修状況や体調，実習の進捗状況を把握するように努めた。学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され，問題の生じた事例については，全教員で検討し，指導教員，実習担当教授，施設担当教員，実習担当教員が対応に努めた。
- 4) 平成27年6月24日（水）：博士課程後期課程大学院生研究課題中間発表会。リハビリテーション療法学専攻2年生に在籍する大学院生6名（内，作業療法学講座4名）が研

究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では今後の研究方針について教員からアドバイスがなされた。

5) 平成27年8月11日(火)：大幸キャンパス・オープンキャンパス開催。本キャンパスにおいて、保健学科全体では大学教育理念、大学院、アドミッションポリシーなどを、専攻別説明会では学内の作業療法学専攻関連施設を小グループに分割してツアー形式での説明会を実施した。説明会参加者に対して講義室や実習室等を案内し、本学における本専攻の教育理念、方針、具体的教育内容について教員より説明した。午前88名(昨年59名)、午後41名(昨年29名)の参加があった。保健学科全体では総参加者948名であり、愛知県・岐阜県・静岡県からの参加者が8割を占めた。年々保護者からの参加希望が増える傾向にある。次年度の開催は8月10日(水)で、本年度と同様に午前・午後の2回実施となった。

6) 平成27年8月25日(火)：学部2年次編入生入学試験。

7) 平成27年8月26日(水)：大学院博士課程前期課程入学試験。

8) 平成27年8月27日(木)：大学院博士課程後期課程入学試験。

9) 平成27年8月31日(月)：酒井 浩 准教授 ご退任。平成27年9月1日付け、藍野大学医療保健学部作業療学科 准教授に就任。

10) 平成27年9月11日(金)：卒業研究中間発表会(学部4年生22名)。卒業研究の途中経過の報告と教員による指導の機会として実施された。

11) 平成27年9月17日(木)・18日(金)：第18回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会を実施。会長 辛島 千恵子のもと、主催当大学(14名の教員及び1名の 大幸地区事務統括課長)を含む全国13校、参加28名の教員により実施された。平成27年9月17日に理事会(名古屋大学医学部附属病院 外来棟4階会議室於)、総会(名古屋大学医学部 鶴友会館2階大会議室 於)、懇親会(名古屋大学医学部附属病院病棟14階於)を開催。平成27年9月18日(金)に分科会(名古屋大学医学部基礎研究棟 会議室1及び会議室 於)、分科会終了後に施設見学会を実施(医学科解剖実習室及び小児疾患・付き添い家族のための滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」)。(別途 総会資料を発刊)

12) 平成27年9月14日～25日：作業療法入門実習(学部1年生24名)。本専攻に入学し

てから最初の臨床実習である。作業療法における主要な分野（身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、老年期障害分野）の関連の機関・施設6ヶ所の見学を中心とした実習を実施した。

- 1 3) 平成27年9月14～12月11日：作業療法基礎学実習（学部2年生22名）。作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で2年後期に実施している。学生は、身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野及び老年期分野の4領域の医療機関・施設のうち3か所で基礎額実習を実施した。学生1人あたり1か所の実習は3日間とした。
- 1 4) 平成27年12月5日（土）：卒業研究発表会（学部4年生22名）。卒業研究の最終発表会であり、続いて論文の作成が行われた。研究発表会の内容は、卒業研究論文集として発刊した。
- 1 5) 平成28年2月8日（月）：学部の推薦入学試験。
- 1 6) 平成28年2月12日（金）：大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会。本講座からは博士課程前期課程8名が発表を行った。
- 1 7) 平成28年2月18日（木）：臨床実習指導者会議。4年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて、臨床実習指導者会議を開催した。議題は主として平成26年度臨床実習報告、28年度実習計画と大学から主任が「臨床実習の到達目標を考える、基礎学実習の重要性と進め方」について説明をして全体でのディスカッションを行った。
- 1 8) 平成28年2月25（木）・26日（金）：一般選抜前期日程入学試験。
- 1 9) 平成28年2月28日（月）：理学療法士・作業療法士国家試験。本専攻から卒業予定者22名が受験した。
- 2 0) 平成28年3月6日（日）：大学院説明会開催。一般学生16名、社会人2名（計18名）が参加した。
- 2 1) 平成28年3月9日（水）：博士課程前期課程中間発表会。前期課程1年在籍の14名（内作業療法学専攻6名）が研究の進捗状況を報告した。
- 2 2) 平成28年3月25日（金）：学部および大学院卒業式。本年度は学部学生21名（男

性5名、女性16名)が卒業した。大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座では修士号6名(男性3名、女性3名)、博士号1名(男性1名 女子0名)の取得があった。

23)平成28年3月29日(火):理学療法士作業療法士国家試験合格発表。本専攻21名全員が合格した。

3. 国際交流

1) ニュージーランド・ロトルアで9月14日～17日に開催された「6th Asia Pacific Occupational Therapy Congress」に伊藤准教授と大学院生1名・及び既卒大学院生2名が参加し、アジア・オセアニア地域の作業療法士と研究交流を行った。

2) 平成27年11月5日(木)～7日(土):平成27年度名古屋-延世大学学術研究交流事業運営委員会に当専攻の千島と星野が出席(本年度は名古屋大学より延世大学に出向き学術研究交流事業を推進する年度)した。11月5日(木)から7日(土)の日程で韓国 Wonjuキャンパスにて「2015 Yonsei-Nagoya University, Research Exchange Meetings in Health Sciences & Nursing」が開催された。名古屋大学作業療法学専攻大学院生5名(M1より1名、M2より4名)、千島と上村の教員2名が訪韓した。両作業療法学専攻の教員が4セッションの発表座長を分担して進行し、両学それぞれ5名の参加学生が研究成果を発表した。発表会場は多数の延世大学学生と教員の参加があり積極的な質疑応答がなされた(別途抄録集を編纂・発刊)。

4. 鈴木國文 教授ご退任、最終講義と記念式典を開催

平成28年3月5日。最終講義「精神病理・社会・作業療法」大幸東館4階大講義室にて開催。同日「鈴木國文教授 退任記念祝賀会記念祝賀会」(19時00分～21時30分)をホテル・メルパルク名古屋において開催された。「鈴木國文教授 退任記念誌」を発刊した。

5. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに

に行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが、企業や他施設との共同研究も行われている。

5-1 共同研究

- 1) 厚生労働省難治性疾患克服事業（スモン患者のQOLに関する研究：寶珠山・清水・上村・星野）
- 2) 厚生労働省科学研究事業（複合性局所疼痛症候群の評価に関する研究（寶珠山）
- 3) 日本語入力BCIシステムの臨床応用の研究（工学研究科）（寶珠山）
- 4) てんかん患者における脳磁図及び脳画像解析（医学系研究科・小児科，脳神経外科）（寶珠山）
- 5) 手の外科領域における感覚障害と疼痛緩和効果に関する研究（医学系研究科・手の外科，リハビリテーション部）（寶珠山）
- 6) 青年期の精神病理学的研究（学生相談総合センターと共同研究）（鈴木）
- 7) ASD児の情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の効果についての研究（京都：花ノ木医療福祉センター・辛島）
- 8) 中高年者の高次脳機能に関する長期縦断的資料を基盤とする神経心理学的研究（関西福祉科学大学，医学系研究科・整形外科）（伊藤）
- 9) 脳卒中患者の自動車運転再開に関する研究（丹後中央病院）（伊藤）
- 10) 介護職の職業適合性に関する研究（関西福祉科学大学）（伊藤）
- 11) 摂食障害患者に対するリハビリテーションの開発とその効果検証に関する研究（医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部）（星野）

5-2 個人研究

- 1) 精神障害の時代変遷に関する研究（鈴木）
- 2) 精神障害と社会との連関に関する研究（鈴木）
- 3) 発達障害の青年期に関する研究（鈴木）
- 4) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果（辛島）
- 5) 特別支援教育・作業療法士と教員のための環境因子観察表の開発（辛島）
- 6) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究（寶珠山）
- 7) 意識と感覚情報処理能力に関する研究（寶珠山）
- 8) 安静時と課題時の脳磁図による脳活動解析（寶珠山）
- 9) 重度神経疾患（児）の生活支援に向けた新しい支援技術開発（千島）
- 10) 脳波応用による生活支援技術に関する研究（Brain-Computer Interface 研究）

(千島)

- 11) ヒトの情報処理機構と運動機能に関わる基礎的研究 (千島)
- 12) 運動学習における関節運動の変化に関する研究 (清水)
- 13) 感覚入力情報 (視覚・聴覚) の違いが作業効率に及ぼす影響に関する研究 (清水)
- 14) 日常生活活動に及ぼす手指関節の可動域の影響に関する研究 (清水)
- 15) 高齢者の情報処理速度と実行系機能に関する研究 (伊藤)
- 16) 高次脳機能障害者の復職を目指した地域連携に関する研究 (伊藤)
- 17) 高次脳機能障害者の就労と自己統制に関する研究 (伊藤)
- 18) 体性感覚刺激に対する関連脳領域間の機能連関の経時的変化に関する研究 (上村)
- 19) 運動感覚イメージ課題による関連皮質領域ならびに皮質間連絡の賦活に関する研究 (上村)
- 20) 高齢者の活動・参加の実施項目に関する研究 (上村)
- 21) 作業療法領域における活動・参加の評価法に関する研究 (上村)
- 22) 精神障害者の就労支援に関する研究 (星野)
- 23) うつ病女性の家庭復帰における作業療法介入に関する研究 (星野)

5-3 地域・社会活動

- 1) 平成27年10月～12月 第1～7回愛知県作業療法士会現職者共通研修 (上村)
- 2) 平成27年4月～28年3月 (継続) 名古屋市介護保険認定審査会 (伊藤・清水・上村)
- 3) 平成27年4月～28年3月 (継続) 愛知県作業療法士会機関紙査読委員 (辛島・伊藤・清水)
- 4) 平成27年4月～28年3月 (継続) 名古屋市教育委員会特別支援教育指導室スーパーバイザー (辛島)
- 5) 平成27年4月～27年12月 国立大学PT, OT教育施設協議会会長 (辛島)
- 6) 平成27年1月～28年12月 国立大学PT, OT教育施設協議会・理事 (辛島)
- 7) 平成27年12月～28年 (継続) 福祉施設等リハビリテーション関連スタッフ交流会顧問 (辛島)
- 8) 平成27年4月～28年 (継続) 日本作業療法士協会学術誌「作業療法」編集委員 (辛島)
- 9) 平成27年4月～28年 (継続) 日本作業療法士協会 演題審査委員 (千島)
- 10) 平成27年4月～28年 (継続) 日本作業療法士協会 事務局特設 協会史料編纂委員会 (千島)

- 11) 平成27年4月～28年（継続） 日本作業療法士協会 事務局統計情報委員会委員長（千島）
- 12) 平成27年4月～28年（継続） 日本作業療法士協会 教育部・専門作業療法士審査等委員会：福祉機器 審査等委員（千島）
- 13) 平成27年4月～27年3月 信州大学医学部保健学科作業療法学専攻 特任教授（千島）
- 14) 平成27年9月5（土）・6日（日）日本作業療法士協会主催「教員向け生活行為向上マネジメント研修会（神戸会場）」参加（千島）

（主任：千島 亮）

第11回名古屋大学
ホームカミングデー
平成27年度名古屋大学大学院医学系
研究科(保健学)

市民公開講座

ここまで来た放射線治療！～重粒子線でがんを治す～

後援：愛知県看護協会、愛知県診療放射線技師会、愛知県
臨床検査技師会、
愛知県理学療法士会、愛知県作業療法士会

名古屋大学医学部保健学科は、平成24年度より名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）に名称が変わり、大学院としての教育や研究を一層充実していくこととなりました。私共は昭和58年以来、大学での研究成果や知的財産を地域の皆様に還元することを目的として、健康や医療に関わるテーマで一般市民の皆様を対象とした公開講座を開催してまいりました。本年は、「ここまで来た放射線治療！～重粒子線でがんを治す～」と題して2つの講義を開講いたします。多くの皆様のご来場をお待ちしております（受講は無料です）。

◎開講日時 平成27年10月17日（土）10：00～12：10

◎開講場所 名古屋大学大幸キャンパス 東館大講義室（東館4階）

◎受講料 無料

◎定員 100名 事前の申し込みが必要です。

※ 当日直接ご来場された場合でも席に余裕があれば受講いただくことができます。

◎開講時間・題目・講師

「ここまで来た放射線治療！

～重粒子線でがんを治す～」

第1講 10：10～11：00 「重粒子線とは？ X線、陽子線とのちがい」

（講師：小森 雅孝・名古屋大学大学院医学系研究科 医療技術学専攻・准教授）

【内容】 “重粒子線がん治療”という言葉を目にする機会があるかと思います。重粒子線とは何だろう？X線、陽子線とはどう違うの？そもそも放射線とは何だろう？といった疑問に、理工学の立場から答えていきたいと思っています。さらには装置の違いについても考えてみたいと思っています。

第2講 11：10～12：10 「重粒子線がん治療の実際」

（講師：伊藤 善之・名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学専攻・特任教授）

【内容】 がんは今や日本の国民病と言われ、超高齢化社会が進む中、さらにはがん患者の割合が増加すると予測されています。今回の講演では、「重粒子線がん治療の実際」についてお話することで、エックス線やガンマ線などの従来とは異なる放射線治療に触れていただき、重粒子線に対する理解を深めていただきたいと思います。

◎お申し込み方法

- ・はがき、ファクス、または 電子メール、のいずれかでお申し込みください。
- ・お申し込みには、①氏名（フリガナ）、②年齢、③性別、④職業または学校名、を必ず記入してください。
※電子メールの場合、表題を「市民公開講座申し込み」としてください。
- ・締め切り：10月9日（金）到着分
※受講可能な場合、お申し込みへの返信はいたしません。

◎お申し込み先

〒461-8673

名古屋市東区大幸南 1-1-20 名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）教務学生係

Fax：052-719-1506

E-mail：ihogakumu@adm.nagoya-u.ac.jp（申込み専用）

◎会場への交通案内

<地下鉄利用の場合>

名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅下車（1番出口）徒歩10分、または、名城線「砂田橋」駅下車

（1番出口）徒歩10分

<JRまたは名鉄利用の場合>

JRまたは名鉄「大曽根」駅から徒歩20分、名鉄「矢田」駅から徒歩10分

JRまたは名鉄「大曽根」駅からゆとりーとライン「ナゴヤドーム前矢田」駅下車徒歩5分

JRまたは名鉄「大曽根」駅から市バス「砂田橋」行き「大幸三丁目」下車すぐ

◎その他（個人情報保護、自然災害等の取り扱いについて）

受講申込書などに記入された氏名、その他の個人情報は、本公開講座の運営のみに利用させていただきます。また、台風に伴い、名古屋市に暴風警報が発令され、午前8時までに解除されない場合には、安全確保のため、公開講座は中止とさせていただきます。加えて、災害や感染症の流行等が生じた場合についても、公開講座は中止とさせていただきます。その際は、本研究科ホームページ（<http://www.met.nagoya-u.ac.jp/>）上でお知らせしますので、開講前は特にご注意願います。

本年度の講座には、76名の事前申し込みがあり、当日の出席者数は78名であった。出席者の内、61名からアンケート回収にご協力がえられましたので、その結果を以下に示します。

平成27年度大学院医学系研究科(保健学)市民公開講座 アンケート 集計結果

①性別、②年齢構成					⑦実施方法について		
	男	女	計	%	A全体の時間について		
10代	0	1	1	2%		計	%
20代	2	7	9	15%	長い	2	3%
30代	0	0	0	0%	丁度よい	51	84%
40代	3	4	7	11%	短い	0	0%
50代	2	5	7	11%	未記入	8	13%
60代	5	8	13	21%	計	61	100%
70代	9	8	17	28%	Bテーマ毎の時間について		
80代	5	2	7	11%		計	%
未記入	0	0	0	0%	長い	3	5%
計	26	35	61	100%	丁度よい	47	77%
③職業					短い	1	2%
	男	女	計	%	未記入	10	16%
学生	2	5	7	11%	計	61	100%
会社員	6	5	11	18%	C講演形式について		
自営業	1	1	2	3%		計	%
主婦	0	16	16	26%	講演型式	36	59%
その他	4	3	7	11%	参加型セミナー	11	18%
無職	12	5	17	28%	講演型式+参加型セミナー	3	5%
未記入	1	0	1	2%	その他	0	0%
計	26	35	61	100%	未記入	11	18%
④本学の卒業生か					計	61	100%
	男	女	計	%			
はい	7	4	11	18%			
いいえ	18	30	48	79%			
未記入	1	1	2	3%			
計	26	35	61	100%			
⑤本講座を何で知りましたか(複数回答あり)							
	男	女	計	%			
新聞、TV	1	0	1	1%			
区役所	0	1	1	1%			
生涯学習センター	0	1	1	1%			
図書館	1	1	2	3%			
友人情報	2	10	12	18%			
本学科からの案内	17	15	32	48%			
ホームページから	1	2	3	4%			
その他	7	6	13	19%			
未記入	1	1	2	3%			
計	30	37	67	100%			
⑥感想を聞かせてください							
	男	女	計	%			
役に立った	12	20	32	52%			
まあ役に立った	10	9	19	31%			
あまり参考にならなかった	2	1	3	5%			
その他	0	2	2	3%			
未記入	2	3	5	8%			
計	26	35	61	100%			

D 希望テーマ・感想

- ・研究内容の意見交換会、研究内容の開示オープン、開講、一般市民勉強会
- ・地域での健康増進
- ・講義の前半、市民公開講座でもあるので、もう少し分かりやすくポイントは資料に混ぜ込んで欲しい。
マイクの使い方にも工夫必要。聴き難い。後半の講義は非常に分かりやすかった。
- ・未病対応、早期検査診察に対する地域的取り組み。研究の現況、社会的取り組みの現状と今後の見通し。
- ・超高齢社会を迎えサポート要員の不足、資金不足、受け入れ体制システムの貧弱さ等々に対し、どう取り組もうとしているのか。その中で大学の果たす、果たそうとしていることは何か？保健学が災害対策等とともに地域活性化・再生の核（コア）となる方法への取り組み。研究・学問から実践の学問へ・・・。
- ・遠くて参加できませんが、①食品とサプリの安全性について②栄養学とサプリについて食品表示法もふまえて
- ・いつもご案内ありがとうございました。
- ・ヒ尿器系のお話。女性のお医者さんが見つからない。
- ・お話も資料も私には難し過ぎて、私の勉強不足かも知れませんが、もっと簡単にわかりやすく勉強したかった。
- ・前立腺がんの現在・未来の治療について知りたいです。
- ・手術をしたのですが、取りきれないところもあり、医師の他に聞くところが無くて困っています。
- ・遺伝的な疾病。ダウン症などの治療について。
- ・妹が名大看護・助産師と経験したこともあり（古い鶴舞）歴史も合わせて聞きたい。最近と全く違う教育がされているのか？
- ・がん患者に対して看護方面の講座
- ・一部、私には少々難しかったです。
- ・IMRTと従来のX線治療との違い。

<まとめ>

本年度の市民公開講座は、医療技術学医用量子科学講座が担当しました。癌治療の中で重要な役割を演じている放射線治療について、その中でも最近特に注目を集めている重粒子線治療に焦点を当て、2名の講師を選出し、講演を行いました。

第1講は、「重粒子線とは？ X線、陽子線とのちがい」という演題で、医療技術学医用量子科学講座・准教授の小森雅孝先生に放射線とは何かといった内容で、理工学的立場から基礎的な講演をしていただきました。

第2講は、「重粒子線がん治療の実際」という演題で、名古屋大学大学院医学系研究科総合医学専攻・特任教授の伊藤善之先生にエックス線やガンマ線などを用いた従来の放射線治療とは異なる放射線治療である重粒子線治療について詳しく解説していただきました。

講演後の質疑応答も活発に行われ、参加者の興味の高さが伺えるとともに、非常に充実した講演会であったと思われました。

今回の企画は、放射線医学、放射線技術学を専門とする本専攻の教員が、この領域の最新の成果、情報を市民の皆様に提供する良い機会となり、有意義な社会貢献活動になり得たと思われます。

(平成27年度 地域貢献委員会委員長：加藤 克彦)